



しょうてんじょし 焦点助詞「どう」

この節では、文の中で強調したり、注目してもらう部分を表す助詞^{じょし}「どう」の使い方^{しょうかい}を紹介します。

ポイント

1. 文の中で強調する部分には「どう」をつけることがある。
2. 「どう」がついた文は、文末が特別な形になることがある。

1. 「どう」のはたらき

下の会話では、さとる君が^{だれ}「誰が泣いているの?」と聞いて、花ちゃんが「れいが泣いているよ」と答えています。花ちゃんの回答の中で、重要なところはどこでしょう?



さとる君

^{だれ}
誰が泣いているの?

れいが泣いているよ



花ちゃん

^{だれ}「誰が」と聞かれて、「れいが」と答えているので、ここは「れい」が一番重要なところです。こんな時、しむむにでは「れい=が=どう」のように、「どう」をつけて重要な場所を表すことがあります。



さとる君

たる=が なちゅい=*よー?

誰=が 泣いている=か

^{だれ}
「誰が泣いているの?」

れい=が=どう なちゅん=どー

れい=が=こそ 泣いている=よ

「れいが泣いているよ」



花ちゃん

※ このテキストでは、他の言葉と区別するために、助詞の前に「=」をつけています



では、次の花ちゃんの回答の中で、重要なところはどこでしょう？



さとり君

れいは何を食べているの？

れいは ^{たまご}卵焼きを食べているよ



花ちゃん

この場合は「何を」と聞かれて「^{たまご}卵焼きを」と答えているので「^{たまご}卵焼き」ですね。すると、しまむにではこうなります。



さとり君

れい=わ んー かどうい=よ？
れい=は 何 食べている=か

「れいは何を食べているの？」

れい=わ ふがやち=どう かどうん=どー
れい=は 卵焼き=こそ 食べている=よ

「れいは ^{たまご}卵焼きを食べているよ」



花ちゃん

2. 「どう」の文の特別な終わり方

このように「^{どうし}どう」が出てきた文では、文末の動詞や形容詞が“特別な形”になることがあります。



さとり君

しまん=やー	わ=が	わろさ	あたん
-----	-----	-----	-----
ごめん=ね	私=が	悪い	あった
	^{わたし} 私		

「ごめんね。 ^{わたし}私が悪かった」

あい	うら	あらんこ	わ=が=どう	わろさ	あたる
-----	-----	-----	-----	-----	-----
いや	あんた	じゃなくて	私=が=こそ	悪い	あった
			^{わたし} 私		

「いや、あなたじゃなくて、^{わたし}私が悪かったよ」



花ちゃん

さとり君と花ちゃんのセリフに注目してみましょう。二人とも「^{わたし}私が悪かった」と言っていますが、さとり君は「わが わろさ あたん」、花ちゃんは「わがどう わろさ あたる」と、少し形が違いますね。

まず注目したいのは、花ちゃんは「あんたじゃなくて^{わたし}私が…」と強調しているところです。花ちゃんは「^{わたし}私」を強調しているので「わがどう」と「どう」をつけています。

もう1つ違いに気がつきませんか…？ そう、さとり君の「悪かった」は「わろさ あたん」なのに対して、花ちゃんの「悪かった」は「わろさ あたる」と、最後の音が少し違うのです。

動詞の教材で、直説形(普通^{ちよくせつ}に終わる形)として紹介したのは「^{しょうかい}一^{ふつう}ん」だったように、普通^{ふつう}の形は「^ん」なのですが、文の中に「^{どうし}どう」が出てくると、花ちゃんのように「^る一^{ふつう}」で終わることがあります。(「^るる」を使いたいときは、「^んん」が入るところに「^るる」を入れれば大丈夫です)

これは、古文の授業で習う「^{かか}係^{むす}り結び¹」の用法に対応するものだとされています。昔の日本語にあった文法の特徴が、^{けいしやう}しまむにの中に継承されている1つの例です。

1 ある文の要素が動詞によって強調された場合に、文末がそれに対応して、特定の活用形に決まる文法規則のこと。古典日本語や琉球諸語にみられるが、現代の共通語ではなくなっている。

